

札幌の印象

パン・ドンメイ（黒龍江大学ロシア研究所／
センター 2012 年度特任准教授）

今まで私は、日本に北海道という島があり、そこに札幌という美しい街があるということ、テレビや、インターネット、知人の話を通してしか知りませんでした。それに私はこれまで日本へ来たことがなかったので、この町を訪れるチャンスもなかったのです。ところが思いがけない運命の巡りあわせで、私は札幌へやってくる機会に恵まれました。こうして私は招聘研究者として丸5ヵ月も北海道大学スラブ研究センターで仕事をする事となりました。札幌へ来たのはたった半月前ですが、札幌もそこに住む人々も私にとって深い印象を呼び起こしてくれました。

空港での出迎え

2012年10月31日私は札幌へやってきました。空港で私を出迎えてくれたのは、北海道大学の大学院修士課程で学んでいるという高良さんでした。彼がロシア語をほとんど



著者



北大の銀杏並木

同じように感じています。豊富な蔵書を誇る図書室を備えたスラブ研究センターを私はすぐ気に入りました。ここスラブ研究センターで私たちは間違いなく個々の研究分野で大きな成果を挙げるものと確信しています。

美しく趣深い北海道大学のキャンパス

11月初旬、北海道大学のキャンパスはとても美しいものです。いたるところで木々の葉が様々な色を変え、緑の芝生が広がっています。特に趣深く感じたのは銀杏並木と第2農場です。毎日私は仕事へ向かうために第2農場の横を通っています。第2農場の建物は他の建物と違って全てが木造です。年季の入った、飾り気のないこれらの木造建築からは、さっぱりとした落ち着いた印象を受けます。銀杏並木のほうは、その素晴らしさが何よりも気に入っています。道の両側に居並ぶ、背が高く、手入れが行きとどいた銀杏は行き交う人びとを見守っているかのようです。黄色く色づいた木の葉は、太陽に照らされて黄金のように輝き、人びとを楽しませてくれます。銀杏の葉は美しさで人びとを目を見張らせるだけでなく、それを乾かせば咳止めや喘息の薬、痛み止めにもなると言います。それに加えて、銀杏の実のほうも健康によいものです。

自然の美しさのみならず、北海道大学のキャンパスは、私に心の安らぎを与えてくれますが、それはキャンパスにある大学草創期に活躍したクラーク博士の記念碑によるものです。北海道大学のモットーであるクラーク博士の「Be Ambitious」という言葉は前進し、困難を克服するよう私を常に奮い立たせてくれます。北海道大学のキャンパスは何と美しく、変化に富んでいるのでしょうか！

話せず、私の方でも英語が上手ではない（そしてもちろん日本語は話せない）にもかかわらず、それでも私たちは道すがら英語でやりとりをしました。高良さんについて私が知ったのは、彼が歴史を研究していること、以前4年間東京で勉強していたこと、そして妹さんが2人いることでした。そのうちの一人は中国語を話すらしいのですが、彼女は今違う町で働いているそうです。道中私たちはあれこれ話したのですが、私はこの頭の良い青年とおしゃべりするのがとても楽しかったです。高良さんどうもありがとうございます！

スラブ研究センター

北大スラブ研究センターの定例会議で私たち3人の外国人研究員（私は中国から、ヴァジムさんはドイツから、アルカージーさんはロシアから）はセンターで働く皆さんに紹介されました。研究員と事務職員の皆さんは外国人である私たちにとっても親切に接してくださるので、中国にいる時と



第2農場の紅葉
(カラーでないのが残念)

札幌の食事、温泉、雪まつり

明治時代の初め（1870年代）に豊平川の畔に建設された札幌は京都旧市街を模して計画されたとのことで、全ての通りが直角に交わる格子状となっているようです。道に迷うことがないので、私は几帳面に作られた札幌の都市計画に好感を持っています。時間があれば、私はあるいは一人で、あるいは友人たちとよく街を散歩します。札幌には日本やヨーロッパ各地の料理を出すレストランやカフェが多いので、食事の心配はいりません。歩き疲れたら、友人たちと連れ立って温泉でのんびりと過ごします。

他にも、大通公園では毎年2月に氷で作った色々な彫刻を集めた雪まつりがあるのだと聞かされました。世界的に知られた雪の彫刻の祭典をこの目で見たくて、私は2月がやってくるのをもう待ちきれません。



クラーク博士の胸像

温かい札幌の人びと

温かく私を迎えてくれた札幌の人びとはこの上ない印象を残してくれました。ある時私は友人と北大植物園の入り口で会う約束をしました。その時は植物園へ向かう道筋がよく分からなかったもので、途中、男の子を連れて散歩をしていた日本人の男性に、どうすれば植物園へ行けるか尋ねました。その男性は親切にも私を大学の出口まで案内してから、植物園への道を指し示してくれました。私が200メートルほど進んだところ、お父さんと一緒に大学構内を散歩していたその男の子が追いついてきました。振り返ってみると、私が道を訪ねた男性がこちらへ走ってきました。彼が息切れしながら、走ってきて言うには、今日はもしかすると植物園は閉まっているかもしれないとのこと（でも何故なのかは言葉の壁のせいで良く分からなかったのですが）。私は二人にお礼を言って、友達が植物園の入り口で待っているから行かなければいけないと言いました。この日本人の親子連れの振る舞いに私はとても心を動かされました。この心温まった瞬間を忘れることはないでしょう。

札幌の街と人びと、北海道大学の忘れ難く何物にも代えがたい印象は私の心に深く刻み込まれました。

（ロシア語から千葉信人訳、大須賀監修）